

小学校における保育所等訪問支援の効果

－ 教諭に対するアンケート調査 －

○坪本悠希 太田篤志 北野和子 福盛朱里 (株式会社アニマシオン プレイジム)

日本 LD 学会 第 29 回大会(兵庫)2020.10.10～11 にて発表

I. はじめに

近年、様々な発達支援ニーズを持った子どもが増え、学校現場では個々の特性に応じた合理的配慮が求められているが、具体的な対応はまだ手探りの状態であることも多い。このような状況のなかで保育所等訪問支援事業による学校との福祉との連携が増えつつある。この事業は、教育現場の中で教諭と療育の専門家が情報を共有し協力して実践していくものであり、この取り組みを通して地域での支援力がさらに高まっていくと私たちは考えている。

II. 研究の目的

小学校における保育所等訪問支援を効果的に実施するために、実際の支援で現場の教諭は、何を感じ、何を学んだのかを調査し、どのような支援内容が有効であるかを検討する。本研究により、発達障害児に対する地域支援システムの検討や効果的な訪問支援の在り方を明らかにしていくことが期待できる。

III. 方法

1) 対象・調査方法

当事業所が実施している保育所等訪問支援を受け入れている小学校の担当教諭(通常学級、通級、支援学級)34 名に対してアンケート用紙を配布し回答を依頼した。なお事前に利用児の保護者及び関係機関に対して文書及び口頭にて研究の説明を行い研究協力の同意を得た。

アンケートの内容は、教師の悩み、訪問支援による子どもや自分自身の変化、訪問支援の効果、満足度などに関してリッカート尺度及び自由記載にて回答するものである。分析は、リッカート尺度については量的分析、自由記載については KJ法を参考に質的分析を行った。

2) 当事業所の支援の内容

当事業所では、2015 年 4 月より保育所等訪問支援事業を開始し、言語聴覚士、作業療法士、

保育士(特別支援教育士)、理学療法士が、保育園、幼稚園、小学校、中学校に訪問している。現在、小学校への月平均訪問件数は 21.6 件、利用児一人当たりの平均訪問件数は 1.4 回である。主な支援の内容は、子どもの行動理解に関する助言、発達・認知特性に応じた課題の検討などである。

IV. 結果

リッカート尺度については各回答の割合をパーセンテージで、自由記載内容については KJ法を用いて図解化した後、カテゴリを文章化したものの一部を示す。なお【 】は大カテゴリ、[]は中カテゴリを意味する。

1. 利用児(生徒)のどのようなことに悩んでいるのか

自由記載の内容より 42 個のラベルを作成しグループ化した結果、6 つの大カテゴリが見いだされた。中心となった大カテゴリ【先生がしてほしいことと子どもがしてしまわざる得ないこと】には、教師の[こうして欲しいけどしてくれない]思いとそのなかで上手く対処できない子どもの姿[子どもの困り事への反応]があり、この両者の食い違いが悩みの中核である思われた。またこのカテゴリから【一緒にやることへの苦手さ】や【集団への入りにくさ】、【学びへの消極性】などが生じているようであった。一方、[子どものできない]ことを理解しそれを支援につなげたい思い[支援のステップと難しさ]もみられ、【理解して関わり方・支援を知りたい】という大きな支援ニーズが形成されていた。また【保護者との調整】も悩みとして挙げられていた。

2. 訪問支援による子どもの変化

訪問支援によって子どもの姿に変化があったかとの問いに対しては、「非常に変化した」41%、「やや変化した」47%、「変化なし」0%、無回答 6%であった。自由記載の内容より 35 個のラベルを作成しグループ化した結果、4つの大カテゴリ

りが見いだされた。【穏やかさと出来ること】には、わかりやすい配慮やツールの獲得によって教室で落ち着いて取り組むことができはじめた子どもの姿が示された。これは、〔自信〕、〔意欲〕、〔自己の振り返り〕によって構成された【ポジティブな自己意識】と相互に関係するものであった。またこれらの変化は、友だちの関わりへの拡大、交流学級への参加など【携わりの拡大】へ繋がったと思われる。また【訪問楽しみ】には、これらの変化に関与した訪問支援員に対する利用児の思いが示されていた。

3. 教師の教育・支援に生じた変化

訪問支援によって教師の教育・支援に生じた変化があったかとの問いに対しては、「非常に変化した」41%、「やや変化した」38%。「変化なし」0%、無回答 21%であった。自由記載の内容より 28 個のラベルを作成しグループ化した結果、3 つの大カテゴリが見いだされた。〔個々にあわせた支援〕、〔PDCA の意識〕、〔将来・地域への広がり〕などの変化によって【視点の広がり】が生じ、教師に【ゆとりと自信】をもたらしたが、一方で支援内容を活用する【現場での難しさ】も存在するようであった。

4. 訪問支援に対する満足度

訪問支援にどの程度満足したかという問いに対しては、81~100%満足との回答が一番多く、全体の 41%であった。61%~80%との回答は 32%、41%~60%との回答は 12%、21%~40%との回答は 0%、0%~20%との回答は 3%、無回答は 12%であった。

5. 訪問支援への要望

今後、訪問支援に何を望むかとの質問に対しての自由記載の内容より 28 個のラベルを作成しグループ化した結果、4つの大カテゴリが見いだされた。【違う視点での専門的アドバイス】を求める声が多く、さらにそのような支援を【もっと密で継続的な支援】として求める声が多かった。また他児との関係やクラス経営を含めた【周囲も含めた支援】、〔家庭・福祉との連携〕との【連携の手段】としてのニーズもみられた。

V. 考察

今回のアンケート結果より、子ども、教諭ともにポジティブな変化が生じたことが明らかとなった。現場で生じやすい教諭の思いと子どもの行動の

ギャップに対して、子どもの行動理解に関する支援のみならず、子どもの特性に応じた活動の提案により、穏やかに主体的に学ぶ姿勢がもたらされ、子どもの意欲や自信、教諭のゆとりと自信につながっていったと考えられる。また訪問支援によって教諭の視野が広がり、それは具体的な教育内容にとどまらず家庭や福祉との連携などにも広がりがみられた。今後、この連携をさらに強化していく橋渡しの役割が訪問支援にあるように思われる。

本研究は、個人情報および倫理面に配慮を行った。また、発表と掲載について、保護者をはじめ全ての関係機関の同意を得た。また研究にあたって利益相反関係はない。